

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

サタデー・フィクション (兰心大劇院 / SATURDAY FICTION)

2019年 / 中国映画
配給: アップリンク / 127分

2023 (令和5) 年 9月 14日鑑賞
2023 (令和5) 年 11月 16日鑑賞

オンライン試写
シネ・リール梅田



2023-105

監督: 婁燁 (ロウ・イエ)
原作: 虹影『上海之死』 / 横光利一『上海』
出演: 鞏俐 (コン・リー) / 趙又廷 (マーク・チャオ) / パスカール・グレゴリー / トム・ヴラシア / 黄湘丽 (ホァン・シャンリー) / 中島歩 / 王传君 (ワン・チュアンジュン) / 張頌文 (チャン・ソンウェン) / オダギリジョー

👁️👁️ みどころ

私は張芸謀 (チャン・イーモウ) 監督が大好きだが、それ以上に婁燁 (ロウ・イエ) 監督が大好き! 初期の『ふたりの人魚』(00年)も良かったし、『シネマ 34』収録の『スプリング・フィーバー』(09年)、『パリ、ただよう花』(11年)、『天安門、恋人たち』(06年)も、『シネマ 44』収録の『二重生活』(12年)、『ブラインド・マッサージ』(14年)も良かった。さらに、『シネマ 17』収録のスパイもの『パープル・バタフライ』(07年)は最高だった。そんな婁燁監督の最新作が、来たる11月に日本公開!

『パープル・バタフライ』と同じように、同作は“魔都上海”を舞台にした「太平洋戦争開戦前の七日間に繰り広げられる 日本海軍少佐と女スパイの偽りの愛と策略の物語・・・」だから、こりゃ必見!

主演はイーモウガール第1期生の鞏俐 (コン・リー)。彼女の表の顔は人気女優だが、裏の顔は女スパイだ。『パープル・バタフライ』では章子怡 (チャン・ツイイー) と中村トオルが共演したが、本作で鞏俐と共演するのはオダギリジョー。鞏俐は、暗号解読を専門とする海軍少佐の妻・美代子ともウリふたつだそうだから、ひょっとして1人3役? しかして、新たに更新された日本海軍の“隠語”「山桜 (ヤマザクラ)」とは一体ナニ?

日本軍の占領を免れた上海の“英仏租界”を舞台に、中日欧のスパイたちが繰り広げるスパイ合戦の展開とその行きつく先は?

■□■婁燁監督の最新作が11月に日本公開! そのテーマは? ■□■

中国では20代、30代の第8世代監督の躍進が顕著だが、他方で、近時次々と『SHADOW

影武者』(18年)、『シネマ45』265頁)、『ワン・セカンド 永遠の24フレーム』(20年)、『シネマ51』186頁)、『崖上のスパイ』(21年)、『シネマ52』226頁)を發表している第5世代を代表する、張芸謀(チャン・イーモウ)監督の活躍は素晴らしい。

また、私が『シネマ34』に「3つの婁燁(ロウ・イエ)監督作品」として収録した、『スプリング・フィーバー』(09年)(288頁)、『パリ、ただよう花』(11年)(294頁)、『天安門、恋人たち』(06年)(300頁)は、いずれも素晴らしい作品で、私は一気に婁燁(ロウ・イエ)監督の大ファンになってしまった。もっとも、私が婁燁監督をはじめて知ったのは、『ふたりの人魚』(00年)、『シネマ5』253頁)を観た時。水中人魚ショーを演ずる美人女優の周迅(ジョウ・シュン)が美美(メイメイ)と牡丹(ムーダン)の1人2役を演じた同作は、上海の蘇州河を舞台に、美しい人魚をキーワードとして、男は愛する女をどこまで探し求めているのかというテーマを面白く展開させていく物語だった。それに対して『シネマ34』に収録した、前記3作はいずれも鋭い社会問題提起作ばかりだった。さらに、『シネマ44』に収録した『二重生活』(12年)(251頁)、『ブラインド・マッサージ』(14年)(258頁)も、すごい作品だった。

しかして、8月末に私の手元に届いた情報によると、そんな婁燁監督の最新作が来る11月3日から日本で公開されるとのことだった。しかし、「サタデー・フィクション」とは一体ナニ?案内文によると、本作は「第76回ベネチア国際映画祭コンペティション部門正式出品 コン・リー×オダギリジョー共演」で、「舞台は日中欧の諜報部員が暗躍する魔都・上海!太平洋戦争開戦前の七日間に繰り広げられる 日本海軍少佐と女スパイの偽りの愛と策略の物語・・・」だそうだ。それを読むと、こりゃ必見!

■原題と邦題は大違い!12月1日からの一週間に注目!■

本作の邦題『サタデー・フィクション』は、英題の『SATURDAY FICTION』をそのまま使ったものだが、本作の原題は『蘭心大劇院(蘭心大劇院)』だから原題と英題は大違い。ちなみに、「サタデー・・・」と聞くと、条件反射的に『サタデー・ナイト・フィーバー』(77年)を思い出すが、「サタデー・フィクション」って一体ナニ?蘭心大劇場は、当時、魔都と呼ばれていた上海にあった劇場の名前だが、1941年12月1日(月)に人気女優・于堇(ユー・ジン)(鞏俐/コン・リー)が突然上海に現れたのは、その蘭心大劇場で上演される、ユー・ジンの恋人の演出家・譚响(タン・ナー)(趙又廷/マーク・チャオ)演出による舞台『サタデー・フィクション』の主役を務めるためだ。なるほど、なるほど。上海は1937年11月に日本軍に占領されたものの、占領を免れた上海の“英仏租界”は当時「孤島」と呼ばれていた。そして、そこでは日中欧の諜報部員が暗躍し、機密情報の行き交う緊迫したスパイ合戦が繰り広げられていた。なるほど、なるほど、それなら本作の原題にも、英題にも納得!しかし、邦題はなぜ原題を採用せず、英題を採用したの?

日本がアメリカと戦争したことすら知らない今ドキの10代の女の子は、日本時間の1941(昭和16)年12月8日未明に、日本海軍の総力を挙げた機動部隊が真珠湾を奇襲攻撃し

たことを知らないはず。真珠湾攻撃をテーマにした映画は『ハワイ・マレー沖海戦』（42年）、『トラ・トラ・トラ！』（70年）、『パール・ハーバー』（01年）（『シネマ 1』10頁）等、多くの名作がある。

しかして、本作は「太平洋戦争開戦前の七日間に繰り広げられる 日本海軍少佐と女スパイの偽りの愛と策略の物語・・・」と宣伝されているとおり、1941年12月1日以降、日付が表示されながら、日々のストーリーが展開していくから、それに注目！

■□■12月1日。上海に到着したユー・ジンの行動は？■□■

1941年12月1日、上海に到着したユー・ジンは常宿にしているキャセイ・ホテルのスイートルームに入ったが、彼女の動きは何やら怪しそう。本作導入部では、ユー・ジンの前夫である倪則仁（ニイ・ザーレン）（張頌文／チャン・ソンウェン）が日本の特務機関に逮捕されていることが観客に知らされるから、ユー・ジンが上海にやってきた真の目的は『サタデー・フィクション』に出演するためではなく、あるいは、それと共に、前夫のニイ・ザーレンを救出すること？

また、キャセイ・ホテルの支配人として親しげにユー・ジンを迎えたソール・シュパイヤー（トム・ヴラシア）は、表面上はにこやかに「後ほどヒューバート氏もいらっしゃいます」と言いながら、裏ではユー・ジンがタン・ナーに架けた「私は上海にいと伝えて」という電話を盗聴していたから、アレレ。この男も何やら怪しそうだ。この男は、きっと英仏の諜報部員・・・？

他方、本作導入部では、女優であるユー・ジンが、劇中劇の中で秋蘭という女性を演じていることが観客に知らされる。秋蘭は工場労働者としてストライキを主導していたようだが、それは極めて危険な行動だ。ユー・ジンと秋蘭がリンクしていくように見せる本作導入部は、いかにも婁燁監督らしい、そんな謎めいた演出が続くからわかりにくい、婁燁監督特有の暗いトーンのスクリーン上から、ただならぬ緊張感が伝わってくるから、期待感が高まってくるばかりだ。

■□■ユー・ジンの裏の顔は？英仏の諜報部員たちの動きは？■□■

私は何度も上海旅行をしたが、1980年代の鄧小平による改革開放政策によって飛躍的な発展を遂げた上海は、今や東京を遥かに凌ぐ大都会になっている。そんな上海は、1941年当時も「魔都」と呼ばれる大都会だったから、当時“孤島”と呼ばれていた英仏の租界に本拠を構える諜報部員ソール・シュパイヤーや、彼の親友である諜報部員フレデリック・ヒューバート（パスカル・グレゴリー）の12月1日以降に見る活躍（暗躍）は、かなり組織的かつ大規模なものらしい。そこでビックリさせられるのは、大女優ユー・ジンはフレデリックに孤児院から救われ、諜報部員として訓練を受けた過去があり、銃器の扱いに長けた「女スパイ」という裏の顔を持っているということだ。すると、今ユー・ジンは誰から、どんな命令を受けて上海にやってきたの？

シュパイヤーとフレデリックとの関係にも大いに興味が引き立てられてくるが、今、シ

ユパイヤーとの情報交換を終えたフレデリックは、「A49 使者が砦に入った、暗号 375・・・」と打電し、さらに「マジックミラー計画の開始」を打電したが、A49 使者とは？砦とは？マジックミラー計画とは？

シュパイヤーやフレデリックたち、「英仏租界」に拠点を構えた諜報員たちの動きを見ると、まさに 1941 年当時の上海が「魔都」と呼ばれるにふさわしい大都会だったことがよくわかる。その意味はいろいろあるが、少なくともその 1 つは、当時の上海は今でいう“IT の集積地”だということだ。本作には、暗号文を打電する風景が何度も登場するので、諜報部員たちが命懸けで繰り広げるその行為の意味と、重大性をしっかり確認したい。

■□■日本の海軍少佐の任務は？その護衛役は？彼の妻は？■□■

国際的に活躍する日本の俳優・オダギリジョーは、本作では暗号通信の専門家である海軍少佐・古谷三郎役を演じている。司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』（68～72 年）の 3 人の主人公の 1 人である秋山兄弟の弟・秋山真之は海軍兵学校卒業だから、同小説の中では海軍兵学校時代の真之の活躍（やんちゃぶり）が興味深く描かれていて面白かった。また、私が中学生の時に読んだ、獅子文六の小説『海軍』（43 年）では、広島県の江田島にある海軍兵学校の様子が詳しく書かれていて、興味深かった。

古谷は海軍少佐だから、当然この海軍兵学校を卒業しているはずだが、軍令部の通信課に属する、暗号解読の専門家だという彼は、軍人というよりは、むしろ今風の IT の専門家のように見える。それに対して、古谷の護衛役として常に同行している狙撃の名手・梶原（中島歩）は、いかにも軍人かつ特務機関らしい風貌の男だから、本作ではこの 2 人の組み合わせに注目！上海に到着した古谷は早速、12 月 3 日、日本海軍特務部の上海事務所に関係者を集めて“講義”をしていたが、アレレ、アレレ、なぜかその最中に死んだはずの妻・美代子の顔を思い出すことに……。古谷は今、暗号担当の海軍少佐として、すべての海軍の暗号表が更新されたことを述べ、「南はアメリカ」「東南は国民政府」「小柳はイギリス」「泉はシンガポール」「加賀はグアム」、そして「鎌倉は危機的状況が迫っていること」等、次々と更新された“隠語”の解説をしたが、さて「山桜（ヤマザクラ）」とは……。？

他方、古谷の上海入りの情報をすぐにキャッチしたフレデリックは、ユー・ジンに対して「古谷の日本で亡くなった妻は君にそっくりだ」と告げたから、ビックリ！コン・リー演じる大女優ユー・ジンは、一方で秋蘭役を見事に演じていたが、他方でホントに古谷の妻・美代子とそっくりなの？そんなバカな、と思いつつ古谷が背広の内ポケットから取り出した美代子の写真を見ると、なるほど、こりゃユー・ジンにそっくり！

■□■2 人の脇役にも注目！重慶側とは？南京側とは？■□■

本作のメイン・キャストは何といっても、1 人 3 役を務める鞏俐だが、ユー・ジンに憧れて女優を目指したという、今は雑誌社で働いている若い女性・白雲裳（パイ・ユンシャン）（黄湘麗／ホァン・シャンリー）と、『サタデー・フィクション』の制作者で、タン・

ナーと共にその上演のための努力をし続けている男・莫之因（モー・ジーイン）（王传君／ワン・チュアンジュン）という2人の脇役にも注目したい。

なぜなら、スクリーン上には、パイ・ユンシャンが「蘭心大劇場での舞台稽古の様子を見学したい」と言いながら、ユー・ジンに近づくが、それはどうも、女スパイのパイ・ユンシャンとして、女スパイのユー・ジンに接触している感じがプンプンとするからだ。そして、案の定、パイ・ユンシャンがモー・ジーインと車の中で交わす会話を聞いていると、モー・ジーインは「今後は、俺が重慶側の情報を、君が南京側の情報を出すから・・・」と、キナ臭い話を切り出した上、「日本は、間もなくニイ・ザーレンを釈放する。」「近いうちに、ユー・ジンをニイ・ザーレンと面会させる。」との取引を成立させたようだから、アレ・・・。しかして、重慶側とは？南京側とは？『サタデー・フィクション』の制作者である、このモー・ジーインはひょっとして、日本軍にいいように使われている、日本側のスパイ・・・？

この時点ではまだ、そんな“疑惑”しか見えてこないが、本作ラストのクライマックスにおける「蘭心大劇場」での『サタデー・フィクション』の上演では、ユー・ジンの代わりに主役を務めるというパイ・ユンシャンと、『サタデー・フィクション』の制作者のモー・ジーインとの間に、あつと驚く“セックスシーン”が登場すると共に、全く想像もつかない婁燁監督流の“怒濤の展開”になっていくので、それにも注目！

■□■ 倪則仁の救出は？なぜ古谷に接触？租界内で銃撃戦が！ ■□■

「007 シリーズ」のような“楽しいスパイもの”（？）もあるが、『パープル・バタフライ』（07年）（『シネマ17』220頁）に代表される、婁燁監督のシリアスなスパイモノは難しい。婁燁監督は中国人だから、当然、彼が描くスパイものは抗日活動に励むスパイが中心だが、『パープル・バタフライ』では、章子怡（チャン・ツイイー）が演じる可憐な女スパイ（？）と、中村トオル演じる日本のベテランの諜報部員が、予想もできない怒濤の展開を見せていた。さらに、『ラスト・コーション』（07年）（『シネマ17』226頁）は李安（アン・リー）監督の最高のスパイものの1つだが、同作も“東洋の魔都”と呼ばれた1940年代の上海を舞台としたスパイたちの人間ドラマだった。

それらと同じように、本作ではクライマックスになる蘭心大劇場での『サタデー・フィクション』の上演に向けて、①ユー・ジンによる前夫ニイ・ザーレンとの接触とその救出劇、②ユー・ジンの古谷への接触と、ある薬の注射で幻覚状態に陥れた古谷の口から、美代子に扮したユー・ジンがある情報を聞き出す、これぞスパイ！と感心させられる物語、が描かれるので、それに注目！もちろんそこでは、傷ついた古谷を救出するべく、同じく傷を負った梶原が兵士を率いて大奮闘するのだが、ユー・ジンは常にその一歩先を進んでいくから、すごい。幻覚状態に陥った古谷の口から、美代子に扮したユー・ジンがある情報を聞き出す舞台は、キャセイ・ホテル内のある秘密の部屋だが、大規模な搜索の結果、その部屋のありかが露見すると、ソール・シュパイヤーたちの命は風前の灯だ。他方、ユ

ユー・ジンはあくまでニイ・ザーレンの国外脱出にこだわり、彼に同行するの？それとも、『サタデー・フィクション』の上演にこだわり、タン・ナーが待つ蘭心大劇場に戻っていくの？
もっとも、『サタデー・フィクション』の主演は既にバイ・ユンシャンがユー・ジンの代役を務めることになっていたが、そこでモー・ジーインに絡まれた（？）バイ・ユンシャンのあつと驚く行動とは？

婁燁監督作品のハイライトには、雨がつきもの。私はその印象を強くしたのは『パープル・バタフライ』を観た時だ。そこで私は、「今日も雨、明日も雨。そしてこの日もあの日も」の小見出しで、「この映画で目につくのはやたら雨のシーンが多いこと。」と書いたが、それは本作の銃撃シーン等も同じだから、それにも注目！暗い画面には雨の演出がお似合い！そんな味わい方もしっかりと。

■□■山桜（ヤマザクラ）はハワイ！その情報の取り扱いは？■□■

スパイものでは“盗聴”がつきものだが、1941年12月の上海の英仏租界を舞台とした本作では、そのシーンが特に多い。英仏側でその任に当たっているのは、一方でキャセイ・ホテルの支配人の顔を持ちながら、他方で諜報活動をしているソール・シュパイヤーだが、英仏租界を除く上海全域を支配している日本軍がスパイ達を取り締まるため、あらゆるところで盗聴作戦を展開していたのは当然だ。

ユー・ジンが12月1日に上海にやってきた目的が『サタデー・フィクション』の主演を務めるためではなく、日本の暗号担当者たる古谷少佐と接触し、古谷から“ある機密情報”を聞き出すことだったことは、本作がスリリングかつ難解な展開を見せていくにつれて少しずつ明らかになってくる。そんなユー・ジンを恋人として励ますのが演出家のタン・ナーだが、ユー・ジンにとっては、タン・ナーを愛する気持ちと、養父として自分を育ててくれたフレデリック・ヒューバートに報いたいという気持ちのどちらが強かったの・・・？そして、ソール・シュパイヤーに別れを告げたユー・ジンはフレデリック・ヒューバートに対する1通の私信を彼に託したが、そこには一体何が書かれていたの？

古谷による、更新された“隠語”の解説では「鎌倉」が「危機的状況が迫っていること」とされていたが、これは誰でも少し想像がつくものだからまずいのでは？私はそう思ったが、山桜（ヤマザクラ）が何を意味するのかがサッパリわからなかった。「山桜」は山田洋次監督の時代劇3部作のタイトルにもされているくらいだから、日本にゆかりのある隠語？それぐらいの想像はついたが、それがハワイを意味する隠語だったとは！

しかして、何人もの命の犠牲の上に得られたその情報を手にしたフレデリック・ヒューバートは、それをどのように取り扱うの？それはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。それにしても『パープル・バタフライ』に続いて、こんな素晴らしいスパイ映画を作ってくれた婁燁監督に感謝。

2023（令和5）年9月22日記

< 追記 >

■□■婁燁流の“劇中劇”の活用は最高！鞏俐は一人で何役？■□■

映画は暗い空間の中で、広いゆったりした椅子に座り、大スクリーンと大音響で観なければダメ。それが私の持論だから、パソコンの画面上で観るオンライン試写は本来邪道だ。しかし、ストーリーや人物像を理解するためだけなら、それで十分。逆に、ストーリーがわかりにくい場合は何度でも再生できるから、かえって便利な面もある。本作は、もちろん説明調でないから、最初に観たときは、コン・リーが一人二役？三役？と思ってしまうはずだ。さあ、コン・リーは本作で何役を？

本作は、『サタデー・フィクション』の舞台稽古風景から始まるが、そこにはタン・ナー自身も出演するらしく、テーブルに座った女性に「秋蘭さん！」と声をかけるシーンが登場する。そこでは、タン・ナーの役割は明らかにされないが、秋蘭は、中国で有名な女優ユー・ジンが演じる、労働組合の女闘士の役名であることがわかる。劇中劇が面白いのは『恋におちたシェイクスピア』（98年）を見ればよくわかるが、本作では、タン・ナーが演出する『サタデー・フィクション』が劇中劇として何度も登場してくるので、その面白さをしっかり楽しみたい。

■□■ユー・ジンの真の目的は？舞台への出演？それとも？■□■

1941年12月1日に人気女優ユー・ジンが上海を訪れた目的は、週末から蘭心大劇場で上演される『サタデー・フィクション』の主演を演じるため。しかし、それは表向きの目的で、真の理由は別にあつたらしい。

香港から到着したユー・ジンを迎え入れたのは、英仏租界に立つ「キャセイ・ホテル」の支配人ソール・シュパイヤー。いつものスイートルームにユー・ジンが入ると、テーブルの上に1通の手紙が置かれており、その中には1枚の写真が入っていた。その写真には、古谷三郎とユー・ジンによく似た古谷の妻・美代子が写っていたが、これって一体ナニ？この手紙をユー・ジンに渡したのは、ユー・ジンを孤児院から養子として受け入れ、女スパイに育て上げたフランス側の諜報部員で、連合軍上海情報部の責任者フレデリック・ヒューバートだが、その目的は・・・？

■□■見せ場は常に雨！これぞ婁燁監督流！■□■

本作最大の見せ場は、さまざまな“仕掛け”の中でやっと実現した、催眠剤を注射され幻覚症状にある古谷から、美代子になりきった女スパイ、ユー・ジンが日本軍の攻撃目標を聞き出すシーンになる。それをマジックミラー越しに見守るのはフレデリックたちだが、1941年当時の上海の英仏租界を舞台に、こんな大規模なスパイ合戦が展開されていたとは！！このシーンは、キャセイ・ホテル内の秘密の治療室だが、野外で展開される本作の銃撃戦は、いつも雨。古谷や梶原が銃で撃たれるシーンも、『サタデー・フィクション』の制作者であるモー・ジーインがパイ・ユンシャンに“魔の手”を伸ばし、ある部分を切断

されながら、命からがら日本軍の元へ逃げ込むシーンも雨だ。婁燁監督の見せ場は常に雨！
これぞ婁燁監督流の演出を、しっかり楽しみたい。 2023（令和5）年11月17日記

『日本と中国』2283（2023年12月1日）



ハマスが大真のロケット弾をイスラエルに撃ち込んだことにより、中東情勢は混乱を深め続けているが、停戦の見通しは？ 毎年12月8日が今年1941年の真珠湾攻撃が週忌となる。戦後78年間は平和が続いた日本のスパイものは数作が多いが、CIAやMI6を扱う米英や二重スパイを巡る韓国のもは面白い。1930年代の『鷹派』上海を舞台とした中国のそれは？ 浜崎、戦狼2（17年）『臺灣潮』（21年）等の戦争映画大作が目立つ中国だが、婁燁監督の『崖の上のスパイ』（21年）や本作にも注目。女スパイ×海軍少佐を中心とした日米開戦直前七日間の諜報戦は夫婦愛を絡めた国際的探偵だ。今秋再放送された30年前のNHKドラマ『エトロフの謎』は機動部隊の集結場所を巡るスパイものだが、本作の英仏組では諸外国の諜報員が日米開戦の情報を求めて暗躍中。

「偽りの愛と策略の物語」とは？
「パズル・バタフライ」(03年)に続く婁燁監督作品は必見！
「帽子箱×仲村トオルの」
「女スパイ鞆刺×暗号専門の海軍少佐オダギリジョー」

ど、劇心劇場での主演女優が政治犯の夫との面会を口実に、義父でもある外国人スパイと通じるのはその活動の一環？ 機密保持のためすべてを更新した海軍の暗号を特務機関に講義する少佐の前には、死亡した愛妻と瓜二つの女が。これは一体誰？ そこには又女スパイのテクニックとは？ 兩「エトロフ」は『我々が成功せり』一新山登れ1208は12月8日に攻撃を開始せよの暗号だったが、新隠語の「山登」とは一体？
重慶刺×南京刺の抗争も激化する中、『サタデー・フィクション』公演の裏で展開される銃撃戦はド派手なもの。その死闘の中で生き残るのは一体誰？ 命懸けの女スパイが最後に辿り着く情報とは？ 最後に義父に託した私信とは？ 82回目の日米開戦記念日を迎えるに当たり本作は必見だ。



サタデー・フィクション
全国順次公開中
© VINGFILMS

監督：ロウ・イェ
出演：コン・リー、マーク・チャオ、バスカル・グレゴリー、トム・ヴラシア、ホアン・ジャン、中島珠、ワン・チュアン、ジュン、チャム、ソウエン/オダギリジョー
2019年/中国/中国語・英語・フランス語・日本語/126分/モノクロ/5.1ch/1.85/日本語字幕
構：樋口祐子/原語：唐心文劇院
/英語：SATURDAY
FICTION/配給：アック
プリンク 宣伝：樂舎
/eVINGFILMS